

情緒に関する研究

その1 問題提起と、今後の研究指向に 関係する文献の考察

研究第7部 萩原英敏

1 問題提起

今回から、個別研究のテーマに、「情緒」を取り上げる事にした。その理由は、だいたい以下3つとなる。

まず、その1つは、これは全く個人的な事であるが、私自身、過去十数年の研究活動において、精神発達遅滞を含む障害児の教育、そして、そこから派生した、視覚・聴覚障害の早期発見などをテーマにしてきた。この事は、はからずも、結果として乳幼児の視聴覚認知発達を研究するという事になった。一応、最初の計画通りに、研究を完了させた時点で、今後、どのような方向に持っていきべきか考えていたところ、プロジェクト研究「発育・発達にかかわる診断法・健診法・スクリーニング法に関する研究」に、これまでやってきたものを継承できるものではないかと思い、プロジェクト研究を進めてきた。その成果は、プロジェクト研究の中で明らかにされてはいる。ただここで一つ考えさせられた事は、私がこれまで、実験心理学的手法を用いて行ってきた、視覚・聴覚障害の早期発見のしかたを、保健所など、実際の健診の場の、一次スクリーニングに応用するのは、場所、人員、時間などの制約から非常に困難であるという事である。そこで、実際応用出来たのは、簡単な聴覚検査法と、2、3の質問紙法の項目だけだったが、今後、健診の条件がもっと整えられるなら、私が今までやってきた研究が、実践応用の為の、基礎研究にはなるのではないかと、思うのである。

その2つは、研究所の改組により、今まで教育養護相談のみをやっていたのが、心理治療及びカウンセリングをやるようになった。現在担当しているのは、「吃音」「チック症」「興味の偏向」「登校拒否症」などを、主訴としている子ども達であるが、これらの子どもと継続的につきあっていくにつれ、情緒の問題を多く体験させられ、子どもの情緒について、深く考えさせられる事となった。

その3つは、前の②と関係する事ではあるが、私が

「情緒の研究をしよう」と思った1番の理由である。それは、「現代の若者は、新人類といわれ、古い世代の人とは、人間性がちがっている。」などと、よくマスコミなどで言っている。どのような人間性かよくわからないが、一般企業で働く、私と同期の友人の中で、「どうも最近の若者はわからない。仕事を終えて、一杯行こうと勧めても、つきあう者が少ないし、つきあっても最後まで行く者が少ない。途中でサッと抜けて帰ってしまう。何ともしらけている。また、仕事にしてもちょっと注意すると、気にするのかわ翌日から休む者も出るし、何事にも意欲が少なくこちらの指示に対しては、一応きちんとするが、自分達で工夫してみるという、何もアイディアが出てこない。今後、我社の将来は、彼等の双肩にかかっているけれども、どうもこのままだと、心配でならない。」などと、嘆く者が多かった。私達は、団魂の世代と言われ、現在中堅として、第一線でがんばっている者も多い。この現在の境遇が、若者に対して、これら厳しい評価を下したとも考えられるが、あながち、これらの評価は、そう的を外れていないのかも知れない。私は、これらの話をききながら、現代の若者にはびこっている「三無主義」とか「五無主義」といった言葉を思い出した。「無関心」「無感動」「無責任」などと言われる、現代の若者の特徴を、これらの話から、十分くみ込む事が出来たような気がする。ただ、現代の若者の特徴をここで確認しただけでは、私の問題は解決されない、私は日頃の相談、治療の実践を通して、これらの問題は、すでに子どもの時代にまで遡っているという事を、感じていた。○どんなところに連れて行っても、あまり関心を示さない子。○他の子が楽しそうにしているのに、何ら楽しそうな表情をあらわさず、全く感動していないように思える子、○ちょっと困難な場面に出会うと、すぐあきらめてしまう無気力な子、など、これらの例を揚げようとすると、暇がない程である。そして、これらの問題が、よく言われている「知・情・意」という、人間の3つの側面の、バランスを欠いた発達が、その元凶ではなからうかと、常々考えていた。

現代の高度化された日本社会に生活していく為、子ども達は、以前にも増して、高い知識を身に付ける事を要求される。しかも1家族における、子ども数の減少に伴ない、子どもにかかる期待は過剰となっていく。この様な過大な期待は、子どもに、「自由に自分の感情を表現させる余裕」を奪い去ってしまう、また、たとえそのような感情表現をなしえたとしても、それに「共感」するだけの余裕を、大人の方が持ちえなくなっている。この様にして育った若者が、「無感心」「無感動」などと言われてもしかたのない事であろう。すなわち、子どもの時から「情緒」が十分に発達していないのであろう。「自由に自分の意志を表現させる余裕」を奪い去った為、「無責任」や「無気力」の若者が多くなったと考えられるのである。

さて、このような子どもや若者の出現に対して、私が研究・実践活動の拠り所としている、心理学は、どのように展開してきたのだろうか。それは、次の様な事実から察せられる。私が「情緒の研究を手がけてみよう」と思い、ある大店舗の書店に出かけ、心理学関係のある書棚を、探してみたが、驚いた事に、一部でも「情緒」「情動」「感情」という言葉のついた本を見出す事が、困難であった。また外書でも「emotion」とか「feeling」といった表題の本は、ほとんど見かけなかった。これは、「情緒」の問題が、「人格」の一部として取り上げられ、大項目の中の小項目として取り上げられる傾向がある事や、「情緒障害」が「臨床」の一部として取り上げられているなども原因していると思われるが、何しろ、私も含めて、心理学を専攻するものが、今まであまりにも、「人間の行動解発の源」と考えられる「情緒」に、目を向けていなかった事実は否定出来ない。なにしろ、今なお、情緒の発達に、Bridges (1932年)の研究が紹介されるのは、それが普遍の原理なのか、それとも、それ以後(すでに50年も経っている)、ほとんど、この種の研究がなされていなかった為ではないだろうか。この様に「情緒」の研究がなされなかった主たる理由として、まず1つに、「情緒」の研究は、方法論において、困難さが伴う、という事実であろう。例えば、「嬉しい」という感情でもそれを、どういう方法でとらえるか、という事は非常に難しく、ただ表面的に「笑っているから」という視点からのみで、とらえる事は出来ない。「嬉しい」という感情をいだきながらも、それを表面には出さない人は沢山いる。しかし、その様な表現に対して、身近にいる人は、その人の感情を、感じとる事が出来るものであるのも事実である。このように、方法論において、難しい「情緒」をテーマとする事は、科学的手法を最大の

武器として突き進んで来た、現代の心理学とは、相入れないものとなってしまった様である。

次の理由に考えられるものに、高度化された日本社会において、高い知識を要求され、その結果、人々の関心は、「人間は内外界の刺激を、どのようにとらえ、成長していくのか」、すなわち認知の発達に、集中した為ではないかと思われる。この方面の研究は、幼児期は言うに及ばず、最近では、乳児期、さらには胎児期まで、研究が進められ、研究成果が発表されている。ただ、この方面の研究で注意しなければならないのは、「情緒」の研究より、結果を出しやすいという事から、その結果を用いた経済活動に安易に利用されやすいという事である。戦後の経済志向の社会と、心理学の認知発達研究の隆盛は、深い関係があると思われる。

心理学の目標が、人間の精神活動の理解であるとするならば、人間は、外界や内界の刺激をどのようにとらえたか(認知研究)のみならず、それに対して、どのように感じ(情緒研究)、その結果、どう行動に移したか、といった風にみていかないと、全体を見失ってしまう。現代の子どもや若者に見られる問題は、この様な全体的視点に欠け、認知面だけに力点が置かれた為の、アンバランスから派生したものと、考えられるのである。先日保育界のある重鎮の先生が、「心理学」のかわりに、「心育学」という言葉を使われ、現在の保育界に「心を育てる保育」がいかに必要かを述べられた。これは、保育者が、子どもに理解面だけでなく、「豊かに感じる力」を、育てなければならぬという事であろうと思う。心理学が豊かな人間性を育てるのに、帰寄する学門となる為には、「情緒」の研究を含めて、もっと、人間全体をみていかなければならないし、一部の研究にみられるあまりにも科学性を重視するあまり、実態からはずれたやり方からは、脱却しなければならない。

私は、以上の様な、問題意識を持って、今後の「情緒の研究」を推し進めたいと思う。

2 今後の研究指向に関する文献の考察

今まで述べたところで、感情とか、情緒と、いった言葉を用いてきたが、ここで、「情緒とは、怒り、喜びなど、一時的な感情である。」と、また「感情とは、情緒や、好意、嫌悪など特統的な感情傾向も含む、全体的なものである。」と定義しておく。

1) 情緒研究アプローチ

(1) 生理心理学的アプローチ

情緒活動に際して、血液が変化し、筋肉や腺が変化す

る事に着目したアプローチである。この生理心理学的アプローチの研究は、ジェームスの「人間の情緒体験は、刺激に対してある情緒がおこり、それに伴って身体的変化が生じる」と常識的な見方を否定し、「刺激を知覚すると同時に、反射的に身体的生理的变化が生じ、その変化を知覚したものが、情緒体験なのである」とした、ジェームス・ランゲ説の提唱から始まる。これに対して、キャノンやバードは、「情緒は感覚受容器の興奮が脳に伝達され、中枢神経を活性化し、これらが情緒体験として感じられるのである」とした、キャノン・バード説を提唱し、ジェームス・ランゲ説と、真っ向から対立した。また、G.S.R.（皮膚電流反射器）を使っての、情緒の電流変化の研究や、リンズレーの、情緒と脳波の関係を調べた研究などもある。また近年は、サーモグラフィを使って、乳児の母分離時に起きる不安情緒や、観劇場面での情緒を測る研究がなされている。

(2) 意識—無意識側面のアプローチ

喜び、悲しみ、怒り、嫉妬などは、意識化された情緒である。このような情緒を、内省させる事によって調べる事が出来る。これが意識面のアプローチであるが、一方、このような情緒を、無意識の面からとらえたのが、精神分析である。フロイドは、ヒステリーなど、神経症患者の治療にあたり、これらの症状が、きわめて強い情緒的体験に関連している事を見出し、幼児の頃の母親や父親との愛情体験が、将来の人格形成に影響するとのべた。またホーナイは、人のもつ基本的不安感から逃避しようとする事により、対人態度が形成されるとして。また修正フロイド派のエリクソンは、基本的信頼感—不信任感、自律心—恥・疑惑感、自発性—罪悪感、勤勉—劣等感、同一性—役割混乱、親密感—孤独感、生殖性—停滞感、自我の統合—絶望感といったような、人生の各段階において、人間関係を通して学ぶ、自我の感情的側面が、どのように発達していくかが、人格形成にとって非常に大切であると述べている。

(3) 行動分析的アプローチ

泣く、腕をさする、髪をむしる、地団駄ふむ、敵から逃げるなど、情緒の表出を行動面から、客観的にとらえようとするアプローチである。情緒は、この面からとらえにくい為、心理学者が情緒を“扱にくいもの”と敬遠し、情緒研究の遅れを引き起こす元凶ともなった様だ。ただ、客観性の固着から脱却する事により、このアプローチも、新しい展開が見込まれてくるであろう。

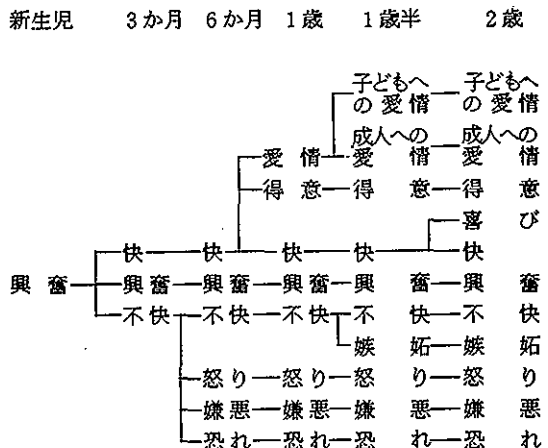
2) 情緒の分類と発達

情緒を分類する事の困難さは、「それが瞬時に感じられるものもあれば、長時間かけて感じられるものもある

という事実である。このような事から、(1)怒り、喜びなど、一時的情緒と、(2)好意、嫌意といった、特続的な対人感情という風に分ける事が出来る。そして、この2つは相互に関係しあっており、「好意を持っている人から、誘われた為、喜び」、またそれとは全く逆な事なども起ってくる。また、ジェームスは、感情を、(1)驚き、有頂天、恐怖、怒り、憎しみ、悲しみ、渴望、といった、明白な身体的表出を伴うものを、粗野感情、(2)道德的、知的、審美的なものに感じ、明白な身体的表出を伴わないものを、繊細感情、として分類している。また、前述した、Bridges は、図1のように、情緒を発達の視点からとらえ、年齢とともに、情緒が分化し、快からは、喜び、得意、愛情などが、また、不快からは、嫉妬、怒り、嫌悪、恐れなどがうまれてくると考えた。また近年、日本保育学会のメンバーが、「日本の幼児の成長・発達に関する総合調査」を行ない、保育所、幼稚園の、Bridges の分類を参考にした、喜び、愛情、不機嫌、嫌い、怒り、恐怖、過敏、恥ずかしがる、しっと、くやしがる、さびしがる、悲しがる、よく泣く、などの面から、情緒の発達をみている。そしてその結果、家庭と園では情緒の表出にちがいがみられる事を明らかにしている。また、コールとモーガンは、感情教育という立場から、(1)感情を楽しむ事を学ぶ。(2)人を動かすのに感情的行為を使う事を学ぶ。(3)感情のパターを習慣的に持続すること (4)感情をかくす事を学ぶ。(5)包括的な感情を発達させること。と、教育の面から、どのように感情が発達してくればよいか、のべている。

以上、今後の研究に関係する文献の一端をあげてみた。

図1 Bridges の情緒分化の図式



参 考 文 献

1. 齋藤勇編著「感情と人間関係の心理」1986年 川島書店
2. 波多野諄余夫, 稲垣佳世子著「無気力の心理学」1981年 中央公論
3. ホーナイ著, 安田一郎(訳)「心の葛藤」1981年 誠信書房
4. エリクソン著, 小此木啓吾(訳編)「自我同一性」1959年 誠信書房
5. 村山貞雄編「日本の幼児の成長・発達に関する総合調査」1987年 サンマーク出版
6. CoLe, L, 8 Moagon, J.J.B. : Psychology of childhood and Adolescence, Rinehart 1947
7. 岩田洋夫, 石井威望他: 情報表示に対する集団的反応を観測するための, 生体情報計測システム, 1986年, 厚生省心身障害研究「家庭保健と小児の成長・発達に関する総合的研究」
8. 近藤洋子, 岩田洋夫他: サーモグラフィによる観劇反応の分析, 1986年 厚生省心身障害研究「家庭保健と小児の成長・発達に関する総合的研究」
9. 水上啓子, 小林登他: サーモグラフィを使った乳児の認知・情報反応に関する研究—母子分離場面における YOUNG INFANT の顔面皮膚温度の変化— 1986年 厚生省心身障害研究「家庭保健と小児の成長・発達に関する総合的研究」